

月報

108号

発行所

青丘文庫

編集・発行★青丘文庫

〒854 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2F

TEL (078) 734-5989

FAX (078) 735-0860

司馬さんの急逝と『季刊 青丘』の終刊

韓 哲 曦

司馬さんが亡くなった。文字どおりの急逝であった。おもいもかけぬ事であった。ご本人も例の顔を斜めにして空を見つめながら、いやいやこれはどうも、といっておられるようにおもえる。まだ72歳なのに。

しかしあるテレビの思い出対談のなかで、どなたかが幸せな死であった。アットというまに亡くなられた。いかにも司馬さんらしい、すべきことはすべてされて、スット幕引をされたといっておられた。

司馬さんが青丘文庫にこられたのは、1982年の夏、文庫がまだ千歳町のエバーグリーンビル5階にあった頃で、貸工場ビルの狭い階段を各階の工場をときどきのぞかれながら文庫にはいられ、相当時間いろいろとお話してきた。『週刊朝日』11月19日号に掲載ののち『街道をゆく』21「神戸散歩」のなかに「青丘文庫」として収められている。取材の動機は飯沼二郎先生が個人で出しておられた雑誌『朝鮮人』の座談会記事と、文庫設立を強くすすめ、基本図書など収集の大枠や文庫名をつけ推進して頂いていた姜在彦氏の示唆によるものであったようである。そのご司馬さんと親交のあった玄文叔氏が共通の友人という事もあったりして、司馬さんをなかにしたこれらの人々のいろいろな集まりに加えて頂き、いまとなっては忘れ得ぬ豊かな思ひ出となってしまった。

今日『季刊 青丘』25号が贈られてきた。終刊号ということであった。「1975年の『季刊 三千里』創刊から、『季刊 青丘』25号まで21年間、私も古希を迎える年になったが、創刊当時は49歳の若さ(?)であった。」
「人生の晩年を、この雑誌とともに歩んできたことを幸せに思う」。わが姜在彦編集委員の終刊の思いである。

一つの時代が終わったのである。

朝鮮民族運動史研究会第一五〇回例会

一九九六年二月一八日午後一時半

金チヨルス論（２）

金森興作

共産党再建運動の末路を確認すべく帰国して逮捕された金チヨルスは、「ぼうつとはしていたが」「比較的自山だった」「獄中世話を終え、一九三九年出獄した。しかし自山のはずの世間には彼は、「獄中よりもむしろ不自由を感じた」、思想報国連盟会費納入を拒否して、自らまた入獄し、解放を向かえた。

四五年八月十七日に釈放され、公州から上京途中の馬致院で、周囲の説得をふりきり一人帰郷した。入獄してくる思想犯が「民族主義者や自派の党員は皆無で、ほとんどが朴憲永派の共産主義者ばかりだった」事実を窺み、「党再建は朴に一任する」のが「良心」だと考えたからであった。二十日後上京し、朴の元で「民族主義者との交渉は自分で」と、李承晩の「独立促進中央委員会」結成運動に張徳秀と努力するも、共産党と韓民党の離反により、左有民族統一戦線樹立運動は失敗した。四六年から彼は、水登浦労働者三百名入党問題に全力を傾注する。今日まで「民安派」崩壊後は「再建派」が共産党の主導権を完全に掌握したといわれてきたが、

実際には、再建派は党中央部を、朴ユン廷、徐重錫らがソウル市党をど、二分され、激しい主導権争いが繰り広げられ、永登浦問題はその象徴だったのだ。金は両派の和解が党発展につながるかと努力したが、多数の労働者を入党させることで党主導権掌握をもくろむものだと中央部は認めず、逆に支部壊滅行動をとっていった。ソウル市党側は一度も開かれていない党大会を開き、この問題解決と党運営の民主化を要求しつづけた。この際中、北で共産党と人民党を合党した北労働党結成を決定するや、南でも新民党をも合わせた労働党をつくり、中央派は強固な主導権掌握を確立しようとした。

ここに金は大会派の中心人物になり、また合同に反対の呂運亨や白南雲等と共に「社会労働党」結成に奔走していった。ところが、北の強い批判を受けるや、呂や白らが早々脱落すると、「意志薄弱な呂を信用した」「自分は誤っていた」と、金は四七年以降、一切政治活動から身を引いたのであった。しかしより本質的には、反中央の先鋒であった労働者達の労働党加入と、李ユン廷除重錫の裏には金日成（チユンギン）がひかえており、両派の対立は実は、朴憲永対金日成との代理戦争であった事実を金が知ったためではなかっただろうか？

在日朝鮮人運動史研究会 第一八〇回例会

村の生活組織をめぐる一考察

― 韓国・済州島の事例から ―

伊地知 紀子

今回の報告は、一九九四年七月末から一年間の済州島杏源里滞在に拠るものである。私は、島の北東に位置するこの海村に住みながら、日帝植民地期以降の村の生活と歴史を村人から、できるだけ教えてもらった。

朝鮮に対する日本の植民地支配体制に、済州島も組み込まれていくなかで、その地理的環境から注目されるのは十九世紀末からの日本近代漁業の侵出・乱獲の開始である。朝鮮の海を資源の宝庫とみなした日本は、済州島の人びとの海の畑を荒らしていった。杏源里には、一九三〇年代長崎の潜水器業者が入村し、総督府は鰯・サザエの缶詰工場を誘致し、村人を動員した。

植民地政府による収奪の余波は、解放後にもひびく。解放後の四・三事件、朝鮮戦争を経て、人びとはようやく陸の畑と向き合えるようになり、海や陸からの収穫物での換金性をつかんでいく。様々な形で続く日本との往来のなかで、潜水の道具・作物の種子や農機具を持ち帰る。そこには、いかなる時勢のなかでも出稼ぎをしてきた人びとの経験と知識が織り込まれている。

このような抑圧・搾取の歴史のなかで、村の生活は固定的・閉鎖的で人びとを受動的・静態的な様子としては描かれやすい。しかし、果してそうなのだろうか。私は、支配の歴史の流れのなかにありながらも、それに完全に絡めとられることなく、日常生活のなかで人

びとが様々なやり方で抗っていく姿に着目した。そのひとつが、村の生活の互助を成立させてきたスヌルムとチェである。

スヌルムとチェは、それぞれ済州島の言葉である。これまでスヌルムは「近親によるゆい結合であり、農村の労働協力・労働交換のしかた」（泉靖一、一九六六）であり、標準語の「マシ」と同語（朴用厚、一九八八）とされた。チェは、「財物による協力の方式」（泉、同上）、標準語での契と同語（朴、同上）とされた。そして、現在もこれら互助形態が村に見られることについては、村の統合論と解体論の二派がある。

私は、杏源里で儀礼や仕事の場に参加して見たり聞いたりした互助のありようは、先の説明では割り切れないものであった。それは、例えば葬式のような、突発性を含む場では葬式用にすでに組まれてきた村内のチェが用いられるとともに、死者の事情に合わせて村人は柔軟に対応する。儀礼の場をたてるために即効で組まれるチェも登場する。また、仕事の場においても、村の目玉商品であるにんにくの植えつけをめぐる近年始められたチェであるが、内実はスヌルムであったりするものもある。チェそのものも、儀礼と仕事というふうに明確に分けて組まれるのではなく、個々の事情や日々の付き合いと錯綜している。

これらスヌルムとチェの混在する様は、村の統合か解体かという議論に依拠するのではなく、生活を規定する外部からの力に対応する人びとの活力と創造力のありようとして捉えられよう。

* 参考文献の記入もれの部分です。

・ 朴用厚、一九八四、「韓国農村の社会経済的構造と契」

・ 朴用厚、一九九五、「済州島農村の契」

姜在彦著作選 [全5巻]

■A5判／上製
●各巻7210円[税込]

- 第Ⅰ巻 **朝鮮の儒教と近代**……[第1回配本] '96年1月刊行
第Ⅱ巻 **朝鮮近代の変革運動**……[第2回配本] '96年3月刊行予定
第Ⅲ巻 **朝鮮の開化思想**……[第3回配本] '96年4月刊行予定
第Ⅳ巻 **朝鮮の西学史**(鈴木信昭＝訳)……[第5回配本] '96年6月刊行予定
第Ⅴ巻 **近代朝鮮の思想**……[第4回配本] '96年5月刊行予定

研究会御案内、

合同研究会

※朝鮮民族運動史研究会 第一五一回例会

寺間 干後一時半より

テーマ「対立と統合の“鮮満”関係」
報告者 田中隆一氏

※在日朝鮮人史研究会 第一八一回例会

時間 午後三時半より

テーマ「在平成」朝鮮人の形声史」
報告者 倉石一郎氏